日本社会心理学会会報

230 号

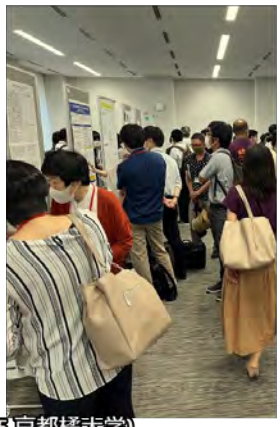
発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　広報委員会（担当常任理事：三浦 麻子）

2022 年 11 月 4 日

日本社会心理学会第 63 回大会 3 年ぶりの対面開催

期日：2022 年 9 月 14 日（水）・15 日（木）
会場：京都橘大学キャンパス（対面開催）　大会準備委員長：永野　光朗

1. 参加者数 447 名（予約参加 318 名・当日参加 129 名）
2. 発表件数 大会準備委員会企画シンポジウム 1 件 自主企画ワークショップ 5 件 発表 252 件（口頭発表 86 件、ポスター発表 166 件）　※各発表の発表論文集原稿は大会データベースに搭載されています。
3. 発表取り消し 6 件



永野 光朗

日本社会心理学会第 63 回大会は，快晴のなか当初の予定通り 9 月 14・15 日に京都橘大学（京都市山科区）にて対面形式にて開催されました。447 名の方にご参加いただきました。

3 年振りの対面開催ということで，久々に会われて笑顔でお話しされる会員の皆様の様子を会場の各所で拝見するたびに嬉しさを感じました。

皆様にご記入をいただきましたアンケートにも対面開催を評価していただく声が多く寄せられていました。また大会運営に関わった学生スタッフの働きぶりをお褒め頂く声を多く頂きました。大会の企画運営をした教員にとって，学生を高く評価して頂いたことは何よりの喜びであり，大会を完遂できたという万感の思いがこみ上げてきます。

大会運営にご協力をいただきました多くの皆様に改めて心から感謝を申し上げます。

（ながの みつろう・京都橘大学・第 63 回大会準備委員長）

参加者からの感想・コメント

これまでは 2 名の会員に参加記を書いていただくのが恒例でしたが，今回は 3 年ぶり（あるいは初めて）の対面開催を喜ぶ多くの方の声をお届けしたく，大会中に広報委員会が実施した調査のご回答コメントのうち，掲載をご許可いただけたものをすべて掲載させていただきます。ご参加ありがとうございました。なお，ご所属表記・句読点など掲載内容は原則的に原文ママです。

発表に関して問い合わせをさせていただきましたが、迅速かつとても丁寧にご対応いただきました。ありがとうございました。（木川 智美・松山東雲短期大学）

ひさびさの対面学会ですごく楽しかったです。特にワークショップでは、異なる主張の先生と仲良く友情を育むことができました！（竹橋 洋毅・奈良女子大学）

久しぶりの対面大会は最高でした。スタッフの感じもとても行き届いており、たいへん感謝しております。（中西 大輔・広島修道大学）

第 63 回 日本社会心理学会の開催、誠にありがとうござい

ます。本大会が対面での社会心理学会は初めての参加で、やはりオンラインでは得られない刺激を多く受け、今後の研究活動に向けてより一層励んでいこうという気持ちになりました。実行委員の先生方には深く感謝申し上げます。（上原 秀斗・九州大学大学院 博士後期課程）

社心では実に 3 年ぶりの対面発表でした。「オンライン上では交流があるけれど会ったことがない」方々とお話することも多く、なんだか不思議な気持ちでした。久しぶりにお会いする先生方や「初めまして」の先生方のお姿を拝見し、研究についてお話できたことが、今回の研究会でのなによりの収穫でした。（中越みずき・関西学院大学大学院社会学研究科）

初めて参加させていただきましたが、非常に刺激的でいい経験になりました。発表内容も興味深かったですし、会場設備も素晴らしかったと思います。（上田 寛・広島大学）

初めて対面学会で口頭発表した D1 です。色々な先生方や院生の皆さんと仲良くなることができ、非常に幅広い研究に触れることができました。こんなに有意義なコミュニティを築く機会は普段全くないので、本当に有難かったです。来年度以降も必ず発表・参加できるよう研究に精進します。（清水 佑輔・東京大学人文社会系研究科）

初めての対面学会でしたが、とにかく楽しく、刺激的で、多くの学びを得ることができました。個人的に感心したのは、大会スタッフの方々の対応の丁寧さです。学会参加が充実したものになったのもスタッフの方々のお陰だと思います。本当にありがとうございました。（大坪 快・九州大学大学院人間環境学府）

久々の対面学会を開いてくださりありがとうございました。スタッフの方々は皆親切で丁寧で、会場案内も分かりやすかったです。ポスター会場はもう少し広くても良いかと感じました。修士の学生さんで、知り合いが少ないので寂しいとおっしゃっている方がいました。思いつきで恐縮ですが学会デビューバッヂみたいなものがあると、そういう修士の方に話しかけやすくなるかなと思いました。（ターン 有加里 ジェシカ・東京大学）

どの発表も興味深く心から楽しむことができました。今回久々の対面で「覚えて下さっているか？」不安になり、ご挨拶したい先生方や友人にお声かけできないことがありました。申し訳ございません、次の機会ではご挨拶させて頂きたいと思います。そんな私にお声をかけて下さった皆様、感謝申し上げます。（井奥 智大・大阪大学）

対面かオンラインか，時期的にもまだかなり判断の難しいところだったと思いますが，対面での開催をしていただけて，とてもよかったです。この後の某同類イベント運営のためにも大いに参考になりました。 開催校のみなさま，お話させていただいたみなさま，ありがとうございました！（武田 美亜・青山学院大学）

発表に伴う議論のほかに、久々に会う方々とすれ違いざまに近況や研究の話をする場面も多く、とても楽しく過ごせました。「（オンラインではよく会うが）対面でははじめまして」のこともあり、充実した大会でした。準備委員会のみなさまや、大会開催に尽力いただいた方々に感謝申し上げます。（正木 郁太郎・東京女子大学）

大学院に入学して、初めての対面での学会参加となりました。久しぶりの対面学会で、学会発表やその延長としての議論など、圧倒的な情報量の多さに浸ることができました。他大学の院生や先生方との交流を通じて、さらに研究を深めようという活力を得ることができました。（柏原 宗一郎・関西学院大学 社会学研究科）

久しぶりの対面学会で、たくさんの方とお会いすることができて、研究内容はもちろん、近況や各大学の様子をお話しすることができて楽しい時間を過ごすことができました。対面発表も久しぶりで、緊張感もありましたが、多くのコメントや質問をいただき充実感がありました。ありがとうございました。（木村 昌紀・神戸女学院大学）

久しぶりの対面での学会。留学生の発表が多くなったという印象を受けました。日本の社会心理をどんどん盛り上げて欲しいです！（新谷 優・法政大学）

ポスター発表に参加致しました。たまたま隣り合った先生方との議論や、聞き手との即時的な対話など、対面形式にしかない様々な価値に改めて気付くことができました。何より、会場内のあちこちに飛び交う「久しぶり！」という歓声や笑顔が印象に残る、とても温かい大会でした。（小野 由莉花・京都橘大学）

初めての対面の社心大会，大変満足でした。同世代の若手研究者の数多くの参加のおかけで，ストレートなコメントを頂き，意見交換ができ，とても有意義な時間でした。（趙 暁辰・宇都宮大学）

口頭発表会場と比較して、ポスター会場が著しく狭かった。感染対策なら、むしろポスターにもっと広いスペースを確保してほしかった。（高橋 伸幸・北海道大学）

オンライン上でしか交流がなかった方々とも初めて対面でお話しできました。私見ですが、昨年・一昨年のオンライン学会と比べて、1 件の発表に対する質問・コメント数の偏りが緩和されたように感じました。また、会場内は案内のスタッフや掲示が豊富で迷うこともありませんでした。（中田 星矢・北海道大学、日本学術振興会）

私は今回が大会初参加で、どんな雰囲気なんだろうという不安もありました。しかし皆様の鋭くも温かい質疑やコメントから、立場の垣根を越えて皆がよりよい研究を目指す場の素晴らしさを実感しました。参加後にはまた来年も参加したいと素直に思いました。運営に携わられた全ての方々に感謝いたします。（若井 大成・東京大学大学院教育学研究科）

この度は 3 年ぶりの対面参加で、とても楽しかったです。日本で口頭発表を行うのは初めてでしたが、実りある経験になりました。様々な分野の発表を聞けたりして、大変勉強になりました。今回の経験を自分の研究に活かしていきたいと思います。(陳 佳玉・名古屋大学大学院)

久々の対面学会ということで、社会心理学と周辺領域の研究者が「一堂に会することの影響」を強く感じました。言語化が困難ですが「会う」ことや、その場に「いる」ことの刺激が強かったです。オンライン開催と比べ、他人の議論を覗きやすい利点もあるかと思います。そして何より交流が楽しかったです。(上田 皐介・名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

社会心理学会大会に初めて参加しました。口頭発表で大勢の参加者に聞いていただくことは，研究をブラッシュアップする良い機会となりました。また，参加者の研究報告を見聞きすることは，非対面大会とは異なり，今後も研究を頑張ろうと思えるきっかけとなりました。2 日間ありがとうございました。(藤川 真子・広島修道大学)

M1 として初めての対面での学会参加となりました。他大学の様々な先生方からコメントをいただける非常に貴重な機会でした。また、他大学の院生との交流も非常に楽しいものとなりました。オンライン開催に変更になる学会もある中、対面での学会開催にご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。(比留間 圭輔・青山学院大学大学院社会情報学研究科)

社会心理学会での初めての口頭発表が久々の対面学会ということで、とても緊張しました。発表後に会場や休憩室で「発表見たよ」「こんな論文もあるから共有するね」と声をかけていただけたのがとても嬉しく、そうしたちょっとした議論ができるところが対面学会の良さであると感じました。(水野 景子・関西学院大学・日本学術振興会)

3 年ぶりに学会で口頭発表をしました。多くの人にご意見頂けたこと、とても良かったです。また、オンラインでタイトル検索だけでは惹かれなかったであろう興味深いポスター発表に多く触れることが出来ました。そして普段はなかなか関わる機会が少ない方々と交流することができ、非常に有意義でした。(藤浪 遼太郎・明治学院大学大学院)

久し振りの対面学会。スタッフの学生の方々も親切で、気持ちよく 2 日間を過ごす事ができました。ランチの心配もしたのですが、学食が広くコロナ対策もバッチリでした。ただ、ポスター会場のコロナ対策は甘いように感じた。空気が流れていないあの空間で、あれだけの密集はいかがなものだったか？ (小西 浩司)

久しぶりに皆さんにお会いできて楽しかったです。足は疲れましたが、対面の良さを実感しました。準備にあたっていただいた皆様に感謝いたします。(匿名・東京未来大学)

ポスター発表は盛況で発表者と身近でやりとりできたのがよかったです。清水先生のワークショップでの問題提起と提案は画期的でこのお話を聞けただけでも大会に参加する価値が十分ありました。ぜひ参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。(匿名・兵庫教育大学大学院)

(以下，匿名コメントを列挙します。)

スタッフの皆様ご苦労様でした。当日の運営はスムーズで誘導も分かりやすく安心して参加しました。

ポスターセッションでのディスカッションが白熱し、対面方式の魅力を再確認した。

対面で参加した初めての学会であり、アカデミアの雰囲気を直に感じられた点で非常に有意義な経験になりました。特にプロの研究者の方々の語り方を生で体験できたのは、学生として学ぶ立場の者として大変勉強になったと思っています。会場のスタッフの方々も親切な方が多くて良い印象でした。

対面参加は初めてでしたが、いろいろな方と交流ができ勉強になりました。オンラインだと一人で画面と対峙するかたちになるので、対面でないと体感できないことがありとても楽しかったです。

ポスター会場が狭かった

休日での開催がよかった。

会場内の学生の皆さんの案内が親切で素晴らしいと思いました。

対面でおしゃべりできてよかったです。準備・運営ありがとうございました！

今回が初めての大会参加でした。似たようなことに興味を持っている人がいるということを実感できたことが 1 番大きな収穫だったかもしれません。また、会話の中でさらに理解が深まるように感じられたポスター発表が非常に楽しかったので、来年以降発表できるように真摯に研究に取り組もうと思いました。

休憩室に飲み物・お菓子があって嬉しかった。休憩室に行くと、知り合いに会えた。

準備委員会の皆様，大会の準備・運営ありがとうございました。スタッフの皆様のおかげを持ちまして，会場の移動など滞りなくできて充実した時間を過ごせました。COVID-19 の都合上致し方ないのは重々承知しておりますが，総会参加のインセンティブが低くなっているのが少し気になりました。

久しぶりの対面参加で楽しかったです。また、新しい知り合いができて嬉しかったです。

スタッフの方々 (特に学生の皆様) がとても気配りされていて、快適に過ごせました。ありがとうございました。会場のキャパ的に仕方ないと思いますが、もう少しポスター同士の間隔が広いと嬉しかったです。

完全対面の大会、お疲れ様でした。準備委員会はすごい勇気が必要だったと思います。ただ、オンラインの要素も少しは残しておいてくれるとよかったように思いました。

久しぶりの対面ということもあり、全体として大変有意義で楽しかったです。また、京都橘大学の皆様のサポートが素晴らしく、いつも笑顔で親切で、すれ違う度に必ず気持ちの良い挨拶をしてくださるなど、期間中、爽やかな気分で過ごすことができました。スタッフの皆様に是非お礼をお伝えください。

久しぶりに多くの方と会えて議論ができ，大変嬉しかったです。

久しぶりの対面でポスター発表や口頭発表でのやりとりが新鮮でした。WS（学際的な社会心理学の構築を目指して）で研究の難しさと面白さを知りました。

やはり対面は良いなという感想に尽きます。発表中の議論はもちろんですが，休憩中や廊下で久しぶりに／初めて会った先生・院生とざっくばらんに近況や研究の議論をする中でちょっとした思いがけないヒントがいくつもありました。このようなラフな会話の大事さを改めて感じました。

コロナ禍以後に大学院に入学したため初めての対面学会参加でしたが、楽しく参加することができました。学会の進み方や用意するべきものなど勝手がわからない部分も多々あり大変な部分もあり、参加を不安に思っていた部分もありましたが参加してよかったと思っています。

いろいろと難しい状況の中、素晴らしい大会運営だったと思います。会場のスペースも十分で、安心して参加できました。ありがとうございました。

初めての対面での学会参加だったが、昨年のオンラインでの参加と異なり、すごく充実した時間を過ごすことができた。特に、ポスター発表や口頭発表において、感じたことをすぐに伝え、発表者とその場でやりとりできたのがすごく楽しかった。

初めての対面での学会発表で、多くの方と直接議論することができた点が非常に有意義でした。口頭発表とポスターセッションの重複が多く、全て見て回ることができないのは残念でしたが、その忙しさすら刺激的でしたので、来年度も対面開催ができることを祈っています。

勤務の都合で 1 日のみの参加でした。会場の案内の学生の皆さんがとても親切でありがたかったです。

久々の対面学会で、学生スタッフの皆さんの明るさやきびきびした働きぶりが印象的でした。会場はとても素晴らしい施設でした。ポスター会場でもう少し換気の配慮があればより安心できたと思います。

託児所を利用しました。事前から丁寧に対応をして頂き、当日もスタッフの皆さんにとてもよくして頂き、非常に助かりました。子どもも「また学会の保育園行く！」とご満悦でした。託児がなければ学会参加は難しい状況が続くので、来年度以降もぜひお願いしたいです。

大学の秋学期開始と被る日程だったため，８月後半から 9 月第一週か，せめて土日開催にしていただきたかった。

初めての参加で緊張していたが、会場が広く、席の数にも余裕があったため、気持ちを楽にすることが出来た。施設もとても綺麗で使いやすかった。

****

堀毛一也先生・釘原直樹先生が名誉会員に推戴

日本社会心理学会 2022 年度総会にて，堀毛一也先生，釘原直樹先生が名誉会員に推戴されました。日本社会心理学会に対するこれまでの多大なる貢献に心より感謝申し上げます。この度の推戴に対し，両先生よりコメントを頂戴しております。以下に掲載いたします。

名誉会員推戴ありがとうございます

堀毛 一也

このたびは名誉会員への推戴，誠にありがとうございます。まずは岡会長先生はじめスタッフの諸先生方に厚く御礼申し上げます。

私の社会心理学会での発表は，大学院生時代に，恩師の大橋英寿先生のご指導のもと行った，沖縄のフィールド研究が最初だったと思います。テーマはシャーマニズムで，沖縄のシャーマン「ユタ」とオバアたちの関わりを，主婦の社会化という視点から分析したものでした。原稿は和文タイプで苦労しながら仕上げた思い出があります。当時麻雀にあけくれていた私に，研究者としての道筋や，実践と理論の結びつきを丁寧にご指導いただいた大橋先生には，本当に御礼の申し述べようもございません。先生と，その後も長いお付き合いとなった沖縄国際大の山入端先生との，沖縄北部の部落の公民館での生活は未だにわすれられません。布団もなく床でごろ寝しながら，毎晩泡盛の 1 升瓶が壁際に並んでいくという夢⁉のような生活の中で，今思えばグラウンデット・セオリー的な論議が続き，理論構築の過程が体験できたことは，本当に貴重な経験だったと思います。

就職して自分のテーマを模索することになり，そこで光をもたらしてくれたのが，対人行動学研究会という組織でした。大坊先生，安藤先生はじめ，所属する諸先生方の洗練された発表や論議は，私にとって鮮烈な刺激となり，調査や実験に対する興味を引き立ててくれました。とりわけ大坊先生には，当時山形におられたこともあって，大変目をかけていただきました。その後

もかわらぬご厚情を賜りましたこと，あらためて厚く御礼申し上げます。

次第に学会のお仕事や査読などにもかかわらせていただくなかで，これまたロール・モデルのお一人として感謝を捧げたい大渕先生とともに，長期にわたり東北地区の理事をつとめさせていただきました。特に査読は，他学会も含めて 200 本近くを読ませていただき，学界に対する多少の貢献にはなったかと思います。そのような中，大坊先生に続いて安藤先生が会長に当選され，私も意外なことに常任理事を拝命することになりました。ちょうど東日本大震災の年で，また安藤先生・大島先生のご尽力で東洋大に異動することにもなり，公私ともども大変な状況になってしまいましたが，今になってみればよい思い出です。

常任理事としては大会運営担当をお引き受けすることになり，前任者の村田先生にいろいろ手を尽くしていただき，担当そのものは何も苦労もなく過ごせたのですが，唯一翌年の開催校だけが見つからず途方にくれておりました。そんな折に，ちょっとした用事で山入端先生と連絡をとった時に大会の引受先がみつからず大変と話をしたところ，「ん，いいよー」と二つ返事で開催をお引き受けいただきました。当初信じられず，「学会だよ!?」「1000 人規模だよ!?」と何度も聞き返してしまったことを覚えています。その後，大城先生を大会長，山入端先生を事務局長として，東江先生，中村先生はじめ沖縄の多くの先生方のご協力で無事大会を開催していただきました。これも元をたどれば大橋先生のご人徳によるもので，本当に感謝にたえません。

個人的には様々な研究テーマに関心があり，ひとつのテーマを深く追求することを怠ってきましたが，最後にポジティブ心理学に出会うことができ，これまでの研究をまとめる視点を持てたことは幸いだったと思います。ただ，研究者としては，粘り強く 1 つのテーマを追いかけることが重要だとしみじみ感じています。

最後に，岩手・東京と 20 年以上にわたる単身赴任生活を支えてくれた，よき伴侶であり研究者としてもよき同僚である妻裕子に最大の感謝と御礼を述べたいと思います。遺言めいた言い方になりますが，本当に様々な方に支えられた研究者生活でした。ただ，まだしばらくは成果の発表なども続けるつもりでおりますので，容赦ないご指導ご鞭撻を賜れば幸いに存じます。ご推戴賜りましたこと，あらためて厚く御礼申し上げます。

（ほりけ かずや・東洋大学）

社会心理学会における経験

釘原 直樹

名誉会員に推戴いただきましてありがとうございます。私は，あまり本学会に役に立つようなことをしたという認識がありません。2：6：2 の法則を考えれば，一生懸命の期間は 2 しか（も）なかったのではないかと思っています。そのため，この認知的不協和をどのように解消したらよいのかわからないままでいます。

私が社会心理学会に入会したのは 1983 年頃だったと思います。社会心理学会に入会する前に，すでにグループダイナミックス学会に入っていまして，本学会に入会しようとは思っていませんでした。私が抱いていたイメージは，社会心理学会は東京を中心とした都会のスマートな人たちの集まりというもので，少しネガティブでした。また指導教授からは「君は社会性がないから社会心理学会には向かないのではないか」と言われたこともあります。ところが，1983 年に，その当時，社会心理学会の学会誌であった年報社会心理学に論文を掲載させて頂き，自分の書いたものが活字になって有頂天になると同時に学会のイメージも変わりました。「良い友は物をくれる人」という言葉がありますがそのようなものでしょうか。

社会心理学会の会員になり，最初は大船に乗ったように感じました。ところが，当時この大船が揺れていて不安になったことも憶えています。1985 年 1 月発行の会報には「社会心理学会が危機に瀕している」と書かれていました。「一番の問題は学会における若い世代の活力不足」「学会に魅力がない」との言葉もありました。また当時の若い世代の意見が掲載されていました。それは「本年度の大会時に会った数人の第三世代の先輩達は，学会会場の近辺に来ながら，参加費を惜しんで観光だけして帰るそうであった」というものでした。まさに自分のことを指摘されているようで後ろめたい気持ちになったことを憶えています。このように，その当時の大御所の先生方の熱い思いや危機感，それから当時の若い研究者の意欲があって今の社会心理学会が存在しているのではないかとも思っています。

本学会の役員についてはいくつか引き受けましたが，そのなかで最も自我関与が高かったのは 2009 年から 2 年間務めさせていただきました編集委員長だったと思っています。私はそれまで「長」がつく役を引き受けたことがほとんどありませんでした。小学校の頃学級委員長になったことくらいでしょうか。編集委員の先生方や阪大研究室の助教の方，それから事務局の方々に助けられて何とか職責を果たすことができました。今でも編集会議で編集委員の先生方に注目されながら話をしている情景や学会の総会で壇上に座っている情景と，その時の緊張感を思い出します。

このように本学会では研究発表の機会を与えて頂いただけでなく，様々な経験もさせて頂きました。感謝しています。

（くぎはら なおき・無所属・大阪大学名誉教授）

第 24 回(2022 年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

本年度の日本社会心理学会賞は，優秀論文賞 2 編，奨励論文賞 1 編，出版特別賞 1 編，出版賞 1 編が選考され，第 62 回大会総会にて発表，総会後に授賞式が行われました。各賞をご紹介するとともに受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方，おめでとうございました。

優秀論文賞

正木 郁太郎・村本 由紀子
「ダイバーシティ信念をめぐる多元的無知の様相：職場におけるずれの知覚と誤知覚」（第 37 巻第 1 号）
小宮 あすか・岡野 佑美・坂田 桐子
「後悔が災害関連行動に及ぼす影響：平成 30 年 7 月豪雨に着目した検討」（第 37 巻第 2 号）

今回は優秀論文賞が 2 本選出された。第 1 号に掲載された正木・村本論文は，職場における自身のダイバーシティ信念及び同僚の信念についての推測を個人・集団（社内部門）レベルで調査し，多元的無知の様相を明らかにした研究である。第 2 号に掲載された小宮・岡野・坂田論文は，平成 30 年 7 月に西日本に甚大な被害をもたらした豪雨災害を経験した人たちを対象に，災害時の後悔がその後の避難行動に及ぼす影響を検討した研究である。今回，優秀論文賞が 2 編選出された理由として，いずれの論文も例年の優秀論文賞の水準に達していることに加え，評価された点の共通性が挙げられる。例えば，両研究に共通する特徴として，データそのものの高い価値が挙げられる。正木・村本論文で報告されるデータは，実際の組織のデータであり，コンビニエント・サンプル（大学生）を対象とした研究では得られない洞察を与えてくれる。一方，小宮・岡野・坂田論文は，実際の災害で後悔を経験した・しない人たちを対象に，その後の実際の避難行動を調べており，これも外的妥当性が極めて高いデータである。それに加え，いずれの研究も応用研究という側面を持ちながら，社会心理学の理論的・方法論的な厳密さを併せもつ総合的に優れた研究であることが高く評価された。

奨励論文賞

小谷 侑輝・齋藤 美松・金 惠璘・小川 昭利・上島 淳史・亀田 達也
「分配の正義とリスク下の意思決定：効用モデルと瞳孔反応による検討」（第 37 巻第 1 号）

分配的正義判断（第三者の立場でどのような分配を良しとするか）とリスク選好（自分自身の報酬に関わるリスクへの態度）という一見すると無関係な特性が，無知のヴェールというロールズの正義論の概念によって概念的に結びついていることを実証的に示した研究である。具体的には分配への選好・リスク選好を測定する従来の実験課題に加えて，無知のヴェール下での報酬分配を扱う新しい課題を用いた行動実験（研究 1）を行っている。それに加えて，課題遂行時の情動反応を計測するために瞳孔反応を従属変数に含めた研究 2 を行っている。新しい課題の開発及び瞳孔反応を従属変数に用いるという独創性が高く評価された。

出版特別賞

大坊 郁夫
『人を結ぶコミュニケーション―対人関係におけるウェル・ビーイングの心理学』福村出版

本書は 50 年に及ぶ著者の研究人生で理解を深めてきたコミュニケーションと対人関係に関する知見がまとまった良書である。この領域での研究を志す若手には優れた導入となる。そのような教科書的な側面があると同時に，著者の主に大阪大学時代の仕事が数多く紹介されており，著者自身のキャリアを踏まえた領域紹介になっている。そのため，若手にとっては，単にどのようなことがすでにわかっているのかを知るだけでなく，研究のキャリアを積んでいくとはどのようなことなのか，その実例を垣間見ることができる。以上の観点から，本書の内容を（社会心理学に対する貢献を多様な観点から評価する）日本社会心理学会出版特別賞にふさわしいと評価し，推薦するものである。

出版賞

縄田 健悟
『暴力と紛争の“集団心理”―いがみ合う世界への社会心理学からのアプローチ』ちとせプレス

本書は集団による暴力と紛争について「集団心理」という観点からまとめたものである。研究者だけでなく一般の読者にも十分理解できるように書かれている。「はじめに」によれば，著者は学部生の頃に，かねてから不思議に思っていた集団による暴

力・紛争を生み出す「集団心理」について知りたいと思い，「集団心理」をキーワードにしてデータベース検索を行ったそうだ。そして，「集団心理」が学術用語ではないことを認識し，それでは集団による暴力・紛争にどのようにしてアプローチしたらよいのかと考えたことが本書の原点となっている。本書では，その原点から現在までの著者自身の研究を踏まえて見えてきたことが，「集団モード」という概念を中心に紹介されている。

選考委員会が本書を出版賞にふさわしいとして推薦する理由は大きく次の 3 つである。第一に広範なレビューとご自身の研究が巧みに融合されている点。第二に社会心理学の枠組みにおさまらない多様な観点が紹介されている点。第三に一般の読者にもわかりやすい構成・記述になっている点。以上の観点から，本書を日本社会心理学会出版賞にふさわしい内容であると評価し，推薦するものである。

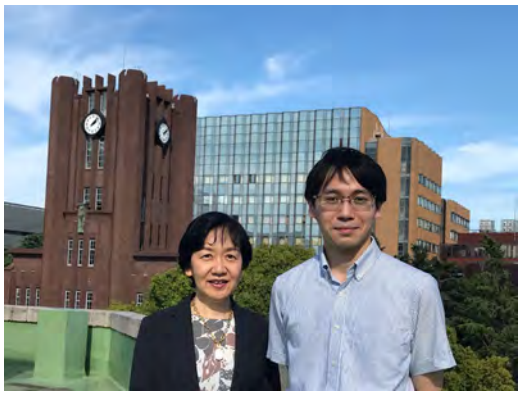
選考委員

委員長　大坪 庸介
理事　稲増 一憲・浦 光博・五十嵐 祐・小塩 真司・竹村 和久・田中 堅一郎
会員　尾崎 由佳・小杉 考司・膳場 百合子・高岸 治人

受賞コメント

優秀論文賞受賞の御礼

正木 郁太郎



この度は栄えある賞をいただき，大変光栄に存じます。新型コロナ前の出版特別賞に続いての受賞で，自分でも驚くばかりですが，多くの先生方や共同研究先の方々のご指導の賜物と思っております。深く御礼申し上げます。

本論文は，現代の企業において大きなテーマとなっているダイバーシティに関する諸問題に対して，多元的無知と集団規範という社会心理学の伝統的な理論の観点から取り組んだ調査研究です。ある企業で働く方々を対象としたマルチレベルデータを使用しましたが，ならではの意義と苦労があり，個人的にも学ぶことが多い内容でした。

そもそもの研究の着想・発端は，多元的無知には集団現象としての側面があるのだから，ダイバーシティという集団にまつわる具体的問題や，マルチレベルデータを用いて理論・実証的に検討する余地があるのではないか，という素朴な発想でした。いざ取り組んでみると，ダイバーシティにまつわる様々な認識のギャップや，それがなぜ問題か，どういった介入が必要になりうるかといったことの一端が明らかになり，大きな意義を感じるものになりました。社会心理学的アプローチに基づく企業調査で，かつマルチレベル分析を用いるもの，という前例が限られる研究であり，明らかにできなかったことも多くあります。そうした取り組んでみて初めて分かった課題も含めて，今後の研究の糸口となれば幸甚です。

一方で，研究の実現には多くの苦労もありました。調査協力企業とは，あるセミナーでの講演をきっかけに出会いました。担当の方に研究内容に関心を持っていただき，社内へつないでもらい，調査実施からフィードバックに至るまで，二人三脚（コアメンバーは二人以上ですが）で成り立った研究でした。回収率の高さにも先方のご協力の強さが表れていますが，この手の研究は当然一人では成り立ちませんし，相手組織と研究者の双方に大きな労力が求められます。フィールドを対象に充実した研究を行うためには，たとえそれが一つの研究でも，背後に多くの方々による努力の蓄積が必要なことを身をもって痛感しました。

このような経緯で成り立った研究ですが，いざ出版されてみると，アウトプットを通じて更なる学びもありました。まず実践的な意義です。この論文を読んだある企業の方に伺った話ですが，実務家にとっても「空気」「規範」は重要な問題であると素朴に分かる一方で，介入が難しいことが厄介だ，という認識のようです。それに対する介入の糸口になりうる点で，多元的無知に関する実証研究には実務的な意義も期待できるとのことでした。また，多元的無知という言葉こそ知らなかったものの，実際にそれに関する介入をなさっている，などの接点を感じさせるお話も何人かの方から伺いました。本研究に限らず，社会心理学がよりよい社会の実現に貢献できる余地は，想像以上に大きいのかもしれません。そして研究内容とは少し異なる気づきですが，実務家に届きやすいという点で，あえて日本語の論文として発信することの意義もたしかにあると再認識しました。

最後になりましたが，本論文の査読および選考にあたって尽力いただいた先生方や，研究をともに実現させていただいた調査協力企業の方々，また常に励ましのお言葉と温かいご指導をいただいた共著者の村本由紀子先生に，この場を借りて感謝申し上げます。今後とも学術・実務の両方に有意義な研究を続けられるよう，励んでまいります。この度はまことにありがとうございました。

（まさき いくたろう・東京女子大学）

優秀論文賞を受賞して

小宮 あすか

このたびは優秀論文賞に選んでいただき，大変光栄に思っております。まったく予想だにしていないことで，連絡をいただきまして，大変驚きました。

この研究はもともと共著者である坂田先生から 2018 年の夏頃に「広島県が行っている防災意識調査の担当者となっており，もしよければその調査に参画してみないか」とのお誘いがあったことから始まりました。ちょうどそのときに後悔をテーマとして卒業研究に取り組みたいと言っていた当時学部 3 年生の岡野さんを分析主担当として，約 1 年半取り組んだ調査研究の成果が今回の受賞論文です。

本研究の主眼は「被災した際に経験した後悔は，将来の防災行動に活かされるか」という問いに答えることにあります。もともと後悔には過去の失敗から学び，将来のより良い行動を促進する機能があることが論じられています。本研究は，こうした後悔の基礎研究の知見をベースとして，人々が被災時に何を後悔し，何を学ぶのか，またそうした後悔経験が防災行動を促進しうるのかを検討しています。この研究に着手するまで，私は災害や防災に関する研究に，またそもそも応用研究にもほとんど携わったことがありませんでした。この調査を進めるのも，論文をまとめるのも，だいぶ手探りで進めていました。ときにくじけそうになりながらも，坂田先生の励ましやご助力を得て，今回研究論文としてまとめきることができました。この場を借りて，坂田先生に厚く御礼申し上げます。

2018 年 7 月の豪雨災害発生当時，実は私自身は広島にはおらず，海外の学会に参加していました。ネットニュースや SNS で回ってくる情報を見ながら，とても不安になっていたことを思い出します（家に猫を残していたので一番の心配は彼のことでしたが）。ちなみにこのときの広島への帰りの飛行機は席がガラガラで，同僚の先生から「西条には食べ物がないので東京で買ってきたほうがよい」と衝撃的な（！）メールをもらったりもしていました。西条に帰った後もニュースでは人的被害の報告数が増え続け，交通や流通もしばらく復活せず，被害の甚大さを思い知ることとなりました。残念ながら，近年では広島以外でも水害の発生をよく見かけるようになりました。水害はある意味予測できる災害です。いかに前もって防災行動・避難行動をとれるかが，少なくとも人的被害の抑制のキーとなります。そうした防災行動をいかに促進できるかに焦点を当てるような応用研究が，今後より多く進められることを願っています。

最後になりますが，この研究に携わった全ての方々に感謝を申し上げます。このたびは本当にありがとうございました。

（こみや あすか・広島大学大学院人間社会科学研究科）

奨励論文賞受賞者を代表して

亀田 達也

第 24 回社会心理学会・奨励論文賞をいただき誠に光栄です。論文の責任著者として著者一同を代表し，審査のプロセスで非常に有益かつ熱意あるフィードバックをくださった諸先生に，心から御礼申し上げます。

本論文は，社会心理学はもちろん，経済学・法学・政治学・社会学などさまざまな社会科学領域をまたぐ共通のテーマである「分配の正義」について，モデルベースの実験社会科学からの接近をはかった研究です。コロナ禍における医療資源の分配で顕在化したように，希少資源をどのように分ける（べき）かという問題は，私たちの生活の根幹に位置しています。

本研究では，政治哲学者ジョン・ロールズが『正義論』(1971) で展開した道徳的直観を出発点に，①社会的分配をめぐる人々の選好がリスク下の意思決定と深く関わり合い，②双方に共通する認知・神経的アンカーとして「最悪の状態をできるだけ改善する」というマキシミン原理（minimum を maximize するという考え方）が強く働くのではないか，という仮説を検討しました。私たちのこれまでの研究（e.g., Kameda, Inukai, Higuchi, Ogawa, Kim, Matsuda & Sakagami, 2016: *PNAS*）では，自分の利害が関与しない「第三者としての分配」場面で，この仮説の妥当性を確認しました。本研究は，この検討を自分の利害が関与する「当事者としての分配」に拡張しようという目的のもと，意思決定中の情動喚起についても，Eye-tracker により瞳孔径(pupil diameter)の変化を計測して探索的に調べたものです。

私事になりますが，この研究は自分の小研究史のなかで意義深いものです。2014 年 10 月からの新しい職場への異動をはさみ，第一著者の小谷侑輝氏は北海道大学大学院における最後の院生，第二著者の齋藤美松博士は東京大学大学院における最初の院生にあたります。この意味で，今回，実験の実施から解析・論文執筆に至るまで，北大―東大をまたぐ若い研究者たちの「有

機的連帯」の成果が受賞の栄に浴したことに深い感慨を覚えます。

分配の正義に関する研究は，地球資源の希少性がますます深刻化するなか，さまざまな分野で活発な展開を見せています。私たちのチームでも，第五著者の上島淳史博士（現イェール大学）は，分配についての他者との合議が長期間（5 ヶ月超）に及ぶ態度変化（マキシミン原理の深い受容）を促すこと(Ueshima, Mercier & Kameda, 2021: *JESP*)，「平等」という言葉で語られる分配の多くが実はマキシミン原理の支持（最不遇への配慮）を意味していること（Ueshima & Kameda, 2021: *RSOS*），などを明らかにしました。また，関西学院大学の清水裕士教授は，数理モデルと行動実験を通じて分配正義のメカニズムを精力的に検討しています。本年の社会心理学会大会でも，個人の選好としての分配正義と，社会規範としての分配正義の区別を明らかにした精緻な研究報告は非常に印象的でした（清水, 2020, 2021, 2022：行動経済学会大会・社会心理学会大会発表）。

私たちのチームでもさらに，分配の正義という社会科学の共通テーマに対して，「世代間の正義」(intergenerational justice)の問題を射程に，また計算社会科学のアプローチを取り入れながら，貪欲に挑戦していきたいと考えています。さまざまな折にまた議論していただけると幸いです。この度は本当にありがとうございました。

（かめだ たつや・東京大学大学院人文社会系研究科）

出版特別賞の御礼

大坊 郁夫

この度は拙著が本学会の出版特別賞をいただきましたことに篤くお礼を申し上げます。

本書は，コミュニケーションが円滑な対人関係を築き，個人及び社会のウェル・ビーイングをもたらす価値のあることを，いくつかの研究成果を踏まえて述べたものです。

対人コミュニケーションは，個人が他者を理解し，ひいては，社会を築くために欠かせない時系列をなす出来事です。そして，個人の特徴，関係，コミュニケーション場面や社会的環境，さらに当事者が属する文化と密接に関連する心理・社会的な複合的な行為とも言えます。この行為の機能を適切に理解し，遂行することは誰をも活かし，充実した人生を保障することにつながります。

この観点から，コミュニケーションのチャネル概念，記号化と解読のルールや機能を検討することから始め，相手との間にある認知や行動のギャップがコミュニケーションを促進すること，相手との親しさが類似のコミュニケーション行動をもたらすこと，親密な対人関係の発展と崩壊においては，コミュニケーションの直接性は曲線的な特徴を示すことなどを示しました。

また，時空の制約の少ないネットワークを介したコミュニケーションは，情報収集や伝達のコストが少なく，容易に満足を得やすい。しかしながら，情報ツールを使用する際の知識の多寡によって新たな格差を生むリスクがあるので，対面のコミュニケーション状況とは異なるリテラシーを獲得しなければならないこと，それは，人対人とは異なるコミュニケーションであることを理解する必要があるのです。

「対人コミュニケーション」は，複数の観点から記述されます。私は，コミュニケーション行動をかなりミクロな時系列データとして扱ってきました。

大学学部生時代に，心理治療，カウンセリング場面のコミュニケーションに関心がありました。その折，恩師から，心理療法，カウンセリング過程を発言・沈黙の時系列データとして扱ったアメリカの Matarazzo らの研究論文を紹介されました。当時としては，心理臨床場面を扱うには斬新な，行動科学的研究でした。その論文に出会い，それまでなかった方法によるコミュニケーション研究を始めることになったのです。

そして，臨床場面に留まらず，基本的なコミュニケーション行動を明らかにすることとし，大学生を対象者として，非対面場面の 2 者間の会話事態を設定し，参加者の発言過程を微細に記録することから始めました。当時は，観察者が発言・沈黙を観察し，ペン書きクロノグラフに記録するというものでした。2 者の発言・沈黙単位の組み合わせを判定し，持続時間，頻度を測定したものです。複数の人間が確認しても相応の測定誤差は免れないものでした。その後，心理学機器の専門メーカーに会話者の音声波形を積分し，矩形波に変換する装置を制作してもらい，発言・沈黙の数値化したデータを分析でき，飛躍的にデータを扱いやすくなったものです。この音声波をデジタル化する方法は，さらに改良を重ねました。この後は，コミュニケーション指標は対面場面での視線，身体動作などへと拡張してきました。

心理学分野では，このようなミクロな時系列データを扱うコミュニケーション研究はごく少数です。その理由は手がけてきた者としてよく分かります。現在では情報科学の技術進歩によって測定法も得られるデータの精度も急上昇しているものの，分析できる段階のデータを得るには膨大な手順が必要です。研究成果を示すには相応の時間がかかります。ですが，このような手順で得られたデータは様々な観点から分析可能です。この種のコミュニケーションデータは，コーパスとして公開される例も登場してきました（例：https://www.dendai.ac.jp/news/20190206-01.html）。

なお, 本書の編集担当者である福村出版の松山由理子さんは, 本書の編集を最後として亡くなられました。松山さんとの縁は, 前の勤務先の誠信書房時代から長く続きました。お世話になりました。　**（だいぼう いくお・北星学園大学）**

出版賞に際して

縄田 健悟

このたびは拙著『暴力と紛争の"集団心理"：いがみ合う世界への社会心理学からのアプローチ』（ちとせプレス）を，2022 年度社会心理学会出版賞に選出していただき，誠にありがとうございます。大変光栄に存じます。

サブタイトルにも「社会心理学」と入れているとおり，この本はまさに，研究者ならびに一般の方に広く知っていただきたい社会心理学の知見を元に執筆した本ですので，日本社会心理学会の出版賞として，社会心理学を専門とする先生方から高く評価いただけたことは，嬉しさもひとしおです。本書が社会心理学の発展とその紹介にわずかでも寄与できたなら心より嬉しく思います。

本書では, 私が卒論で研究を始めて以来ずっとテーマとしている集団間紛争と集団暴力に関する社会心理学の知見をまとめました。特に，コミット型-集団モード，生存戦略型-集団モードという 2 つの集団モードという考え方を手がかりに整理を行っています。本書自体の内容紹介や前書き，および刊行に際しての紹介記事は，出版社ちとせプレスのサイトにも掲載しておりますので，そちらもご覧ください。

本書には，この会報をお読みの社会心理学者の先生方には馴染みのあるトピックも多く記載しております。思いつくままに羅列しますと，社会的アイデンティティ，愛国心と国家主義，没個性化，服従，評判と印象管理，集団間脅威，非人間化などを本書では扱いました。これらに関して，古典研究とその後の展開や，近年注目されている考え方や研究知見，さらには私自身がこれまで行ってきた実証研究まで含めて，私なりの視点も交えて整理した本です。普段から社会心理学の研究・教育をなさっている先生方にはどこか”刺さる”部分がきっとあると思いますので，ぜひお読みいただけますと幸いです。

また，本に対する「出版賞」ですので，本を書くということに関してもせっかくですので，少し書かせて下さい。このたびの本は専門学術書としてのレベルも担保しながら，一般向けの教養書としても読めることを目指して書きました。この点は，やはり論文ではなく，書籍というのをかなり意識しました。論文や学会発表だと社会心理学の中の研究者には届けられても，その枠の外にはなかなかアプローチがしにくいところです。一般の方や，社会科学近隣領域の研究者の方から，読んで勉強になった，面白かったといった感想をネット上で見かけると，いつもよりも広く研究知見が届いたことに嬉しく思いました。また，新聞，ラジオや書評でも本書を取り上げていただき, 本書に関する内容に報道・メディアから問い合わせをいただく機会もありました。近年は発信媒体の多様化や出版不況もありますし, また業績評価における国際査読論文志向はさらに強まっているのかもしれませんが，やはり一冊まとまった形で出された本には，他にはない強みがあると感じました。特に私と同世代くらいの研究者の皆様, 本という形での発信もぜひご検討下さい！何よりも私が他の先生のご研究を一冊にまとめられた形で読みたいところでもあります。

出版賞をいただいたことを励みにますます精進して参りたいと思います。このたびは，ありがとうございました。

（なわた けんご・福岡大学）

会員からのご意見

同じ言葉であっても，世間で語られるものと学術用語に齟齬や乖離があることはしばしばあります。たとえば「心理学」すらその典型かもしれません。そうした言葉のうち「アンコンシャス・バイアス」について，田中 堅一郎会員（理事・編集委員）より，学会に寄せられたご意見が寄せられました。以下にご紹介します。

日本社会心理学会の社会的責任：学術団体として「社会」に発信すべきこと

田中 堅一郎

社会心理学はその名の通り，多くの社会事象や社会問題と繋がっており，社会心理学に対する人々の関心は（少なくとも私が学部生の頃と比べると）高まっていると思われます。「コロナ禍」といわれた 2020 年頃からはその傾向は強く，いつもは物理学を中心に記事を掲載している『Newton』でも，2021 年 1 月号は「コロナ時代の心理学」と題して社会心理学の古典的な研究のいくつかが紹介されていました。しかし，社会心理学の知見が社会に広がっていく過程で，われわれが知らない間に様々な誤解や間違った知識が拡散しています。心理学でよく知られた「トンデモ学説」の事例の一つが『男性脳・女性脳』で，これはすでにかなり普及して，もはや「心理学の基本」と題した最近の書籍にも堂々と掲載されるまでになっています。

私が見聞きする範囲でも社会心理学にも「誤った知識」の事例がいくつかあります。その一つが「アンコンシャス・バイアス」です。“アンコンシャス”と名付けられていて無意識レベルの話かと思いきや，なんとアンコンシャス・バイアスを測定するチェ

ックリストが存在します。無意識のメカニズムがどうしてチェックリストへの回答によって分かるのでしょうか？　しかも内閣府のウェブサイトにアンコンシャス・バイアスを測定するためのチェックリスト項目が堂々と掲載されています。内閣府が「お墨付き」を与えた形になったのか，最近この「アンコンシャス・バイアスチェックリスト」は様々な地方自治体のウェブサイトでも見かけます。内閣府のウェブサイトを見ると，「アンコンシャス・バイアスチェックリスト」を提供したのは某コンサルタント企業のようですが，いずれにせよこの誤った知識はこれからもっと拡大するに違いありません。

さて，こうしたこれまでの社会心理学の学術研究からみて明らかに間違った知識が広がっていくことを日本社会心理学会が傍観していてよいのでしょうか。よいわけがありません。そもそも，社会心理学研究者がこうした「誤った学術見解」が流布していることを，知っていて見て見ぬふりをしつづけることは道義的にはいうまでもなく，法的にも許されないと私は思います。法律用語で申し訳ないのですが，法によって期待される行為を敢えて積極的に行わないことは「不作為」とよばれ，その行為が結果的に犯罪に至った場合など，「私は何もしていない」と弁明したとしても，事と次第によっては罪に問われます。学術研究の事柄でないからといって，SNS やマスメディアに誤った学術見解が流布しているならば，学会としてそれらを正すべくアクションを起こすことを考えるべきです。ましてや，その「誤った知識」が日本社会心理学会で取り上げられる研究課題に近いならば，そうしたアクションは自然なことです。

私が大学生の頃（1980 年代前半）には，科学的研究は社会的価値から自由であるべきだという考え方をもった心理学者が結構いました。そうした考え方を突き詰めて，心理学者は自分の研究についての社会的意味など考えなくてよいと極論することも可能な時代でした。しかし，21 世紀から 20 年以上も経った今日ではその考え方は通用しないと私は思います。社会心理学が社会現象や社会問題を研究対象としているかぎり，自分の行う研究が社会的にどういう意味を持つのか冷静に考える必要があります。

その昔，差別や偏見の問題がオルポートによって社会心理学の研究課題として取り上げられましたが，その頃アメリカ南部で多くの黒人がリンチを受けた“strange fruit”事件が起こってさほど時間が経っていませんでした。オルポートがこの事件を知らないで偏見の研究を始めたとは思えません。古い事例を引き合いに出しましたが，日本社会心理学会は改めてオルポートの社会問題へ立ち向かう「心意気」を再考すべきだと私は思います。

（たなか けんいちろう・日本大学）

会員異動（2022 年 5 月 24 日～2022 年 10 月 31 日）

入会

《正会員》

・一般

赤川 紗弥華（清和大学文学部心理学科講師）、木村 大（産業技術総合研究所ヒューマンモビリティ研究センター）、小林 美由紀（長野県教育委員会心の支援課豊野高等専修学校スクールカウンセラー）

・大学院生

柿本 航哉（東洋大学社会学研究科社会心理学専攻大学院生）、藏田 智之（目白大学大学院心理学研究科大学院生）

《準会員》

髙野 唯（桜美林大学リベラルアーツ学群）

退会

赤嶺 遼太郎、宇佐美 尋子、宇佐美 まゆみ、大浦 真一、越智 宏朗、川崎 友嗣（物故）、川角 公乃（物故）、園田 健司、張 芸誼、萩原 滋、林 春男、方 予辰

・自動退会　岩谷 祥太朗、小川 祐樹、柿本 浩、片山 和男、河井 大介、川端 祐一郎、河村 真千子、北川 茉里奈、琴 允姫、源氏田 憲一、小泉 喜之介、齋木 彩、齊藤 勇、佐々木 小巻、佐々木 康成、佐藤 和成、佐藤 栄晃、塩見 武雄、鹿内 学、白石 浩喜、菅谷 友亮、菅原 優花、千賀 智穂子、立川 経康、田中 椋也、張 騰飛、塚田 知香、テイラー パメラ、畠山 彰文、早坂 太志、藤田 弥世、文倉 斉、細田 一秋、岬 里美、三島 爽暉、三好 理央、山田 純加、山入端 津由、山本 佳奈、山本 翔子、叶 茂鑫、李 之林、和田 義則、渡部 美穂子

所属変更

時津 倫子（成城大学・武蔵野大学・関東学院大学・立教大学）、井手 亘（大阪公立大学大学院現代システム科学研究科）、塚本 伸一（東京未来大学こども心理学部副学長）、廣川 空美（関西大学社会安全学部）、祥雲 暁代（立教大学現代心理学部心理学科教育研究コーディネーター）、丹野 宏昭（株式会社 WizWe WizWe 総研主任研究員）、石井 辰典（日本女子大学人間社会学部心理学科准教授）、大谷 宗啓（滋賀大学）、三上 聡美（中村学園大学講師）、矢田 尚也（大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター特任助教）、山下 史郎（女子栄養大学フードマーケティング研究室教授）、今井 葉子（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻特任研究員）、小林 智之（公立大学法人福島県立医科大学医学部 災害こころの医学講座助教）、新井さくら（玉川大学脳科学研究所）、須山 巨基（安田女子大学・明治学院大学経済学部講師）、木村 駿介（静岡産業大学スポーツ科学部講師）、河村 悠太（大阪公立大学大学院現代システム科学研究科）、栗田 聡子（神戸女子大学心理学部心理学科）、村上始（北海学園大学経営学部講師）、倪 少文（名古屋大学大学院経済学研究科助教）、山本 佳祐（京都文教大学総合社会学部総合社会学科特任講師）、岡田 豊（名古屋医療秘書福祉専門学校）、長田 真人（弘前大学大学院医学研究科助教）、森芳 竜太（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社研究員）、讃井 知（上智大学基盤教育センター特任助教）、今田 大貴（高知工科大学助手）、山田 尚武（日本大学新聞学研究所研究員）、錢 琨（九州大学アジア・オセアニア研究教育機構准教授）、西川 一二（大阪公立大学国際基幹教育機構 高等教育研究開発センター特任助教）

****

『社会心理学研究』掲載（予定）論文

第 38 巻第 2 号（2022 年 12 月刊行予定）

【資料論文】

大坪庸介・日道俊之・稲増一憲・小濵祥子・三船恒裕・多湖淳　政治的謝罪への内集団からの反対は軽減できるか？　過去との分離・現状のシステムへの賞賛の効果への否定的知見

三島 浩路　中学生当時のいじめ被害と高校入学後の学校適応との関連

****

第 32 期役員選挙

2022 年 11 月 1 日（火）午前 0:00 から第 32 期役員選挙のオンライン投票受付を開始いたしました。

選挙権があるのは 2022 年 8 月 31 日（水）現在の正会員で、2022 年度学会費を 8 月 31 日（水）までに納入済みであり、かつ有権者名簿に記載されている方です。

投票サイト：https://iap-jp.org/jssp/vote/member/login**（会員 ID とパスワードが必要です）**

投票期間は、11 月 21 日（月）23:59 までです。ご質問等ありましたら、学会事務局までお問い合わせください。

選挙権のある皆さま、どうぞ奮ってご投票をお願いします。

日本社会心理学会選挙管理委員会

****

編集後記

京都橘大学で 3 年ぶりの対面で開催された第 63 回大会は，久闊を叙する参加者たちの笑顔が溢れる 2 日間となりました。従前の日本社会ではなかなか普及しなかったオンライン会議がコロナ禍によって強制的にインストールされ，そうなってみるとわれわれのコミュニケーションには「わざわざ現地に行かなくてもオンラインで十分だ」「オンラインならすぐ話がつくから便利だ」もあれば「嗚呼オンラインはかくも自由を奪うのか」もあることが実感されました。学会大会は両者をうまく融合することが成功の秘訣？ 来年度大会（開催校：上智大学）はハイブリッドとのこと。楽しみです。　（三浦 麻子・広報担当常任理事）